

村の草分け     = = =     三州横山話より

村の草分けとも言うべき旧家は、字神田の山口と言う家だとも、宮貝津の早川孫三郎と言う家だとも言い、字神田の長者平は、昔長者の屋敷跡とも言いですが、近い頃まで栄えていたのはこの二軒だけでしたが、今はどちらも没落してありません。

山口と言う家は百年ほど前までは非常に栄えていたようで、今でも立派な屋敷跡がありますが、ある時この家の召使が、過って茶釜に紡錘をあてたために、その夜座敷に住んでいた福の神が逃げ出したので、それからだんだん家運が衰えてしまったと言うことです。福の神の姿を見たとは言いませんが、翌朝裏口に、非常に巨きな足跡がたった一つ、後の山の方に向けてあったと言います。(茶釜や茶釜の蓋へ紡錘をあてることを厭む風習があって、蓋へあたったかしら、というぐらいでも早速修験者を招いて祈祷をして、その蓋は川へ流したなどの事実を微かに記憶しています。紡錘を当てるのは、ツム倒れといって厭むとも言います。)

早川孫三郎と言う家は、今から四〇年前に、一家を挙げて東京へ引き払ったようで、今は屋敷跡は畑になっていますが、この家の没落は、村の鎮守が、昔は自分の家の地の神であったという理由で、その森を伐り払って、鎮守を自分の所有の芝刈山へ遷座した罰とも言います。家運の乱れるそもそもの最初は、ある朝、この家の家内が井戸で水を汲もうとすると、井戸車へ、ぱっと優曇華が咲いたとあって、アレ優曇華が、と言って見返す間に消えてなくなったとも言いました。横山の御館と言えば、近郷に鳴り響いた家柄で、座敷の縁側に立って、眼に入る限りの山や畑が、全部この家の所有であったと言います。伝説には、先祖が横山の字コンニャクと言うところの岩山で金を掘って富を獲たとも言って、そこを現今でも金掘りと称えておりますが、別の話ではそこは後世掘りかけて中止した跡だとも言います。

横山の村のものなどは、二、三のものを除いては、対談の叶うものはなく、全部が召使のようで、この家の田植に出なかったため、村を追われるところを、詫びを入れてやっとゆるされたなどの話がありました。全盛の最後の人は、村の者が俗に今様と呼んだ人で、体格も勝れて立派であったと言うことですが、子供の頃は類い稀な美少年で、ある年の田植に、畔に立って苗を運んでいる姿を、通りすがりの道者が見て、こんな山深い土地に、かくまで美しい子供があるものかと見とれて行ったと言うような話もありました。

鎮守の森を伐り払った時は、今から九〇年前だそうですが、故老の話に、幾百年を経過したともはかり知れない古木が、鬱蒼と茂っていて、川を隔てて大海村の鎮守の森と、枝と枝とが相接した間に、無数の群猿が遊んでいた光景は

見事なものであったと言います。